

服部 等作

Tosaku Hattori

デザイン工学

教授

- 1970 東京藝術大学 美術学部工芸学科卒業
- 1987 通産省グッドデザイン賞受賞多数（～平成元年）
- 1988 日本機械工業デザイン賞、産業機械部門賞受賞
- 1989 日本機械工業デザイン賞、部門賞受賞など
- 1990 通産省グッドデザイン賞推薦委員
- 1997 英国大英博物館にて王朝家具の研究のため研究留学
- 1999 日本デザイン学会理事を経て評議員（現在に至る）
- 2000 広島市立大学・芸術学部・デザイン工学学科および大学院芸術学研究科教授
- 2000 文部科学省・科学研究費基盤研究(B)―国際学術調査研究・研究班代表者
- 2001 日本学術振興会・日英科学共同研究事業研究総括者（-2003）
- 2002 国際シンポジウム「少数民族の芸術と文化」京都
2002 企画開催委員長 総合プロデュース、学術展示キュレーション
- 2003 文部科学省・科学研究費基盤研究(B)―国際学術調査研究・研究班代表（現在に至る）
- 2004 文部科学省・科学研究費基盤研究(C)―基盤研究・研究班代表（現在に至る）
- 2005 広島市立大学・芸術学部デザイン工学学科長、大学図書館館長兼務（現在に至る）
この間シュトゥツガルト工科大学、ハノーバ工科大学、ニュールンベルグ大学にて講義

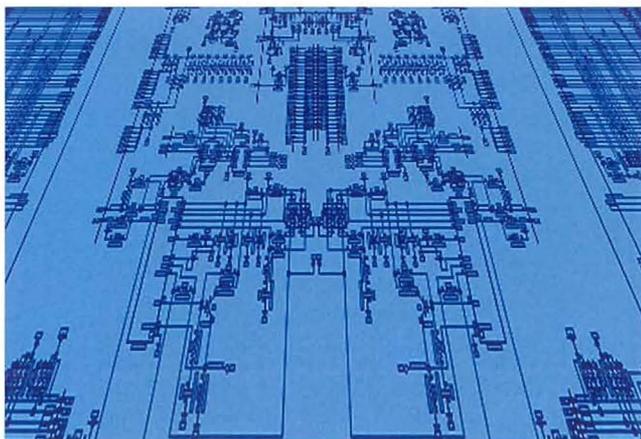
身体性と造形・表現の研究―工業・非工業化の対比で

根本的な伝達のメディアとしての「身体」は、デザイン、絵画、彫刻といった静態的な造形のみならず、芸能、演劇、歌など動態的な表現として芸術領域および活動におおきな位置をしめてきた。こうした造形と表現のメディアとしての、いわゆる「身体性」は、さらなる効率化をもとめ21世紀社会でネットワークとコンピュータ指向のなかで仮想的かつ記号となって瞬時に発信、消費される現状である。身体性は、生命体としての存在が薄れつつある。

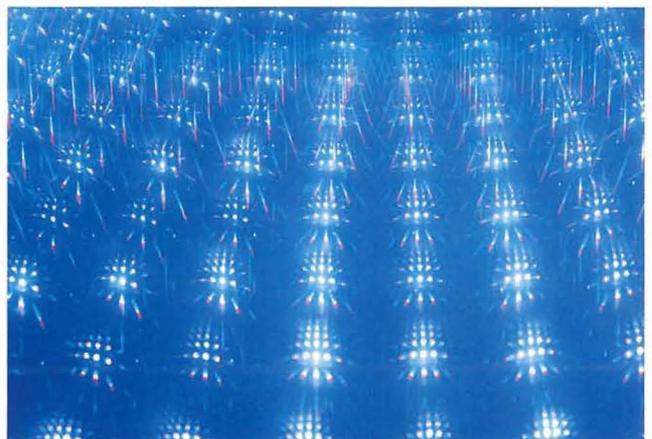
こうした背景にたち筆者は、工業化社会―非工業化社会の対極の関係としての身体性に関心をもつ。まず1)工業社会の視点からは、「身体性としての家具、椅子」の領域について、そして2)非工業化社会の視点では、「身体性としての装飾品」の領域に注目し、アジア各地における芸能、祭祀において身体を飾る品々についてフィールド調査をすすめている。

一方では前者の工業製品に対して、芸術の対象でないとする暴言すらある。しかし心地よくデザインされた椅子、誰もが持ちたがるiPOD、成形され大量生産されるフィギュアといったものは、昔の浮世絵がそうであったように、手作り作品のメッセージ性を越えてファッションと化している。今や工業製品が社会的衝撃となって、新たな芸術、生活にシフトしているのが自明である。後者は、こうした工業社会が触媒となって、いわゆる負の遺産として伝統の喪失、民族や地域固有の伝統文化の衰退現象、とりわけ日本そして多くのアジア諸国が経済発展をめざすなかで、伝統を失いつつコピー文化を身につけようとしている。こうしたアジア世界、とりわけヒマラヤの少数民族の伝統に見いだせる「身体性と装飾品」についての国際学的調査を現在、文部科学省の科学研究費による助成のもとで推進中である。

前述したいずれの研究領域の成果も教育の現場に還元している。



CB シナプス



CB シナプス発光